

題目 根本的帰属の錯誤の合理性：ベイズ計算論モデルによる検討

氏名 宮崎 燎

指導教員 竹澤正哲

私たちが周囲の人間の行動や社会的現象を理解するうえで重要なのが原因帰属である。原因帰属に関する研究が進展するにつれ、帰属理論が確立していく一方で、規範的な帰属から逸脱する傾向が観察されるようになった。その最たる例が根本的帰属の錯誤である。根本的帰属の錯誤とは、ある事象が起きたときに、その原因として環境や状況といった外的要因よりも行為者の属性や態度といった内的要因を過剰に評価して帰属してしまうというバイアスである。これは人間の推論が非合理的なものであることの証拠であると議論されてきた。しかし、Walker et al. (2015) において、根本的帰属の錯誤が合理的な推論の産物である可能性が示唆された。Walker et al. (2015) は、あるテーマに関して賛成もしくは反対の意見を表すエッセイを読んで、著者の態度を推論させる Jones & Davis (1965) の実験結果を、ベイズ推定モデルと比較し、両者の態度推論が一致していることから根本的帰属の錯誤の合理性を主張した。ただ、Walker et al. (2015) のモデルには、推論の前提として用いるパラメータが現実の人間から得られた値ではなく、研究者が恣意的に設定した値であるという問題点もあった。そこで研究①では、Walker et al. (2015) のモデルを再現することで、Walker et al. (2015) では報告されなかったパラメータを求め、その妥当性を検討した。その結果、研究者が恣意的に設定したパラメータは、あまり現実的な値とはいえないものであることが分かった。この結果を踏まえて、研究②では Walker et al. (2015) のモデルを拡張し、より現実に即したモデルを作成した。モデルの変更点は、態度推論の材料となるエッセイについて、ただ賛成か反対という二値データとして扱うのではなく、エッセイの説得力という連続量データとして扱っている点である。このモデルを、実験データを模したダミーデータにフィッティングすることで、実際に実験を行った際に、このモデルによって実験参加者がベイズ推定を行っていることを検証できるか確認した。その結果、実験において、実験参加者が推測した状況の強さを研究者が正確に測定することができれば、このモデルによって、実験参加者がベイズ推定を行っていることを検証できることが示された。